

豪華座談会が実現! 82Zへ信頼を寄せる トップジャズ奏者4名が大集結!!

Part.1



馬場智章／多田誠司／三木俊雄／織田浩司

2002年にシーンに投入されたヤマハのジャズプレイヤー向けのカスタムサクソフォンYAS-82ZとYTS-82Zは、それまでヴィンテージモデル一択だったジャズを志向する奏者に対して新たな選択肢を与えた。

それから20年、今や82Zはジャズ向きモデルの代名詞ともなった。そこで今回は82Zがプロのジャズメンたちから選ばれる理由を探っていく。まずは82Zを愛用する国内の代表的奏者4名による豪華座談会で魅力を語り合ってもらおう。

(文: 埜田九三朗 / 写真: 井村重人 (アーニーズ・スタジオ) / 協力: ヤマハ株式会社、株式会社ヤマハミュージックジャパン)

一週間くらいで自分の理想の音に近くなり変化に驚いた(馬場)

—— ヤマハの82Zシリーズは今年20周年を迎えることになりました。この中でもっとも早くZを使い始めたのは織田さんですね。

織田浩司 そうですね、確かこれ試作品のシリアルは1番で、Zという刻印もないんです(と、みんなに見せる)。

一同 ほー!!

織田 全国の特約店を集めた新製品プロモーションのために試奏してはいたんですが、その時にこれ使おう!と決めたんですね。それ以前は他社のヴィンテージモデルを使っていました。

—— 当時はサクソスといえば某社の一択という感がありましたね。ヤマハさんには申し訳ないのですが(笑)。

三木俊雄 僕はヤマハの前は他社ヴィンテージの2モデルを並行して使っていました。今のヤマハホールの柿(こけら)落としのコンサートに出演することになって、ヤマハの楽器を吹いて欲しいということで試したのが最初のきっかけでした。

多田誠司 僕の場合は、友達からヤマハのインペリアルモデル(現在の400番台シリーズの前身)を譲り受けたのがヤマハとの最初の出会でした。その後、他社ヴィンテージモデルを複数経て初代のヤマハ82Z、そして今の第二世代の82Zに至っています。御多分にもれず自分もヴィ

ンテージ神話を信奉していましたから(笑)、82Z第一世代が出たので使ってほしいと頼まれて「なんだかなあ」と思いながら(笑)、使ってみたら意外に良かった。

馬場智章 僕の場合、アルトのスチューデントモデルを小学校2年の時に使ったのが、ヤマハとの最初の出会でした。小学校5年で手が届くようになったのでテナーを吹けるようになって、他社モデルを経て、現在の第二世代の82Zに変えたのが4年前(2018年)でした。小学校の時は「DIMENSION」などのフュージョンが好きで、そのあとマイケル・ブレッカーに目覚めてテナーに転向したんです。

—— マイケル・ブレッカーにハマった小学生ってすごいですね。

一同 (笑)

馬場 自分としてはごく自然な流れだったんですけど、側から見たらそうかもしれませんね(笑)。アメリカに住んでいると飛行機移動が多くて、その際の気温の変化に以前使っていた他社モデルは敏感すぎたんです。たまたまZを試してみたら良さそうだったので、ひとまず購入したんです。最初に購入した楽器を手にしたのはJ-Squadのツアーの時に、相方である黒田卓也さん(Tp)と音が合わなかったんですが、一週間くらいしたら次第に寄り添えるようになってきて驚きました。新品の楽器ってこんなに変わるのかと、その時に気づいたんです。

多田 楽器って確かに変わるんですよ。あるとき僕の尊敬する池田篤さ

ヤマハ YAS-82Z

[調子] E♭
[仕上げ] ゴールドラッカー
[付属キイ] High F♯、フロントF
[ベル] 1枚取り
[付属品] ネック: AV1、マウスピース: AS-4CM、
ケース: ASC-820
[希望小売価格] ¥495,000 (税込)
◆ヤマハYAS-82ZG (金メッキ仕上げモデル)
¥1,265,000 (税込)
◆ヤマハYAS-82ZUL (アンラッカー仕上げモデル)
¥550,000 (税込)
◆ヤマハYAS-82ZS (銀メッキ仕上げモデル)
¥550,000 (税込)
◆ヤマハYAS-82ZB (ブラックラッカー仕上げモデル)
¥550,000 (税込)



ヤマハ YTS-82Z

[調子] B♭
[仕上げ] ゴールドラッカー
[付属キイ] High F♯、フロントF
[ベル] 1枚取り
[付属品] ネック: TV1、マウスピース: TS-4CM、ケース: TSC-820
[希望小売価格] ¥561,000 (税込)
◆ヤマハYTS-82ZG (金メッキ仕上げモデル) ¥1,551,000 (税込)
◆ヤマハYTS-82ZUL (アンラッカー仕上げモデル) ¥638,000 (税込)
◆ヤマハYTS-82ZS (銀メッキ仕上げモデル) ¥638,000 (税込)
◆ヤマハYTS-82ZB (ブラックラッカー仕上げモデル) ¥638,000 (税込)



んとご一緒したんです。彼はヴィンテージの古い楽器でめちゃくちゃ渋い演奏をする男だったんですね。たまたま背後を向いて聴いていて、「ああ、あっちゃん(池田さんの愛称)の音だな」と普通に思っていたんですが、振り向いたらピカピカの楽器で(笑)。理由を聞いたらヤマハを試しているんだというじゃないですか。「いや、全然あっちゃんの音だよ!」なんて会話をした思い出があります。吹いているその人の音になるということを実際に見て、心から驚きました。

三木 僕もそういう意味ではヴィンテージ一択でした。最初は実はピンとこなかったんです。「どこが気に入らないのか教えてください」と聞かれ、吹き比べたりしながらかなり具体的に気になるところを指摘したりしました。例えば、手にした感じが太く感じたんで、キイの位置を上にしてもらったら「えっ!」っていうくらい変わったんです。こんなことくらいでこれだけ変わるんだということに興味湧いてきて、そこから本気で向き合ってヤマハさんとお付き合いし始めたんです。それは最初まるで「社内プロジェクトX」みたいな感じで……極秘でアトリエ東京のスタッフの方と密かに試行錯誤を重ねていたんです。

明るくて音程が良くて大きな音が出るというのは、
とにかく楽しい(織田)

—— 型番にあるZという文字からは「ジャズ(JAZZ)用の楽器」ということをイメージしてしまうのですが……

織田 僕の楽器にはZという刻印がない。最初62の次だから82ということまでは決まっていたのですが、Zという表記はなかったんですね。ヤマハ側の空気感は確かにそういう感じだったけど(笑)、僕自身はジャズ専用のモデルとは思えなかった。もっとオールマイティな感じでした。明るくて音程が良くて大きな音が出るというのは、とにかく楽しいじゃないですか。

三木 クラシック用のサックスとジャズ用のサックスって、本来ないんじゃないかと思います。どのモデルもその時代の最先端として開発されてきたわけですから。フランスではクラシックの奏者も同じように現在のヴィンテージとして存在するものを使っていたと思います。ただ、アルトとテナーってやっぱり傾向が違うみたいですね。アルトは最初から明るく楽に鳴らせたと織田さんはおっしゃったけど、実はテナーのZは最初そうじゃなくて……抵抗感を強く感じたんです。それをなんとかしたいというのが最初のテーマでした。

多田 まあ、正直なところ僕の場合は、フィル・ウッズさんが使っていたからという単純な理由が最も大きいかな(笑)。彼と同じアンラッカー仕上げの楽器を選んだものそういう理由。ミーハーなんで(笑)。他社のジャズ向きモデルよりZのほうがいいと率直に思いました。

馬場 僕が82Zを知った時には多田さんなど諸先輩がZを使っていたので、素直に「ジャズモデルなんだ」と思っていました。購入するにあたって、ラッカーから銀、そしてブラックや、金まで、全部の仕上げを試せたのも面白かったです。

第二世代登場の頃からジャズの現場で
Zがいいという話が聞こえるようになった(多田)

—— 2002年に始まったZシリーズは、10周年となる2013年に第二世代に移行しています。そのあたりの思い出は?

織田 第二世代はレゾネーターとベルが大きな違いですね。レゾネーターがプラスチックからメタルに変わり、ベルの仕様も変わりました。第二世代はちょっと鳴りすぎてしまうように感じました。それまでどんなジャンルにもオールマイティだったのが、音が抜けすぎてしまうように感じました。現在はレゾネーターもプラスチックとメタルを選べるようになってるのが嬉しいですね。



PROFILE: 多田誠司

1960年、香川県高松市生まれ。88年上京以来、日本ジャズ維新ジャム、大西順子グループ、日野元彦グループ、日野皓正グループ等で活動する一方、自己のアルバムも13枚リリースしている。現在はWe three kings!、The QUARTET、松本茜とのDUOなどを中心に活動中。洗足学園音楽大学などで、後進の指導にも力を入れている。教則本の著書も多数持つ。

■使用楽器: YAS-82ZUL



PROFILE: 三木俊雄

大阪府生まれ。1986年パークリー音楽大学にスクラシップを獲て留学。リッチー・コール・アワード受賞。サクスをビル・ピアース、ジョー・ヴィオラ、アレンジをハーブ・ボメロイ、フィル・ウィルソンに師事。1996年から自己の率いる10ピースバンド「フロントページ・オーケストラ」の活動を開始。2013年リリースの「Stop & Go」はジャズライブ誌「アルバム・オブ・ザ・イヤー」にて第3位を獲得。小曽根真率いる「No Name Horses」のメンバーとして作品も提供している。スイングジャーナル誌人気投票にてテナーサクソ部門第3位。尚美学園大学 非常勤講師。

■使用楽器: YTS-82ZASP

馬場 僕の場合は三木さんとは逆に、とにかく重くしてくれという注文ばかり(笑)。軽いと鳴り過ぎちゃって音がペラペラになるんです。直線的な音を出したくなくて、もうちょっと「周波的」な音、響きのある音を出したくて、それで銀メッキ仕上げという選択になったんです。

—— 馬場さんはアメリカでの活動も長いですが、馬場さんがZを使用していることでアメリカのミュージシャンから何か言われたことはありますか？

馬場 率直に言えばアメリカでは共演者と楽器の話になることは殆どないですね。ただ、僕の音を褒めていただいた時に、「ヘー、ヴィンテージじゃなくてヤマハなのか」みたいなことはたまに言われます。

三木 Zの第二世代が生まれたあたりからの10年間で、何がなんでもヴィンテージ！という雰囲気が随分変わったように思います。10年前はヴィンテージの絶頂期で、値段も高騰していました。そのあたりからZへの関心が高まったようにも思います。

多田 昔から海外のスタジオマンなどからもヤマハはピッチがいいという話は聞いていました。しかしジャズの現場でヤマハがいいという話が聞こえるようになったのはやはり10年前、第二世代が生まれたあたりからじゃないかな。

ヤマハが様々な要求に対応していく様子は本当に「プロジェクトX」みたい(三木)

—— ところで、三木さんの使用している楽器は独特の色ですね。

三木 この色は自分の希望というわけじゃないです。ASPの意味はアトリエスペシャル。つまり限定品ですから、普通のものとは違いを出せるようにということでこの仕上げの色になりました。

—— こうして4名の82Zユーザーが同席するのは初めての試みだったんですが、それぞれご感想は？

三木 多田さんとは同じ現場で会うことがよくあるけど、織田さんとは空港ですれ違ったくらいでしたよね？(笑)。

織田 そうでしたね！今日はこうしていろいろお話できて本当に楽しかったです。



PROFILE: 織田浩司 (オリタノボッタ)

90年に米米CLUBのホーンセクションBIG HORNS BEEのメンバーとなる。以降、B.B.キング、ディー・パープル、Char、TUBE、中島美嘉、平井 堅、米倉利紀、鈴木雅之……等、国内外の数々のアーティストと共演。ライブ、レコーディングに活躍中。BIG HORNS BEE(米米CLUB)、COLORS、mondeskittのメンバー。九州音楽合奏団「九管ポップス」音楽監督、SHOBIz POPS ORCHESTRA音楽監督。フィルハーモニックウインズ大阪ミュージックアドバイザー、尚美ミュージックカレッジ専門学校 講師。作詞／作曲／編曲／プロデューサー。

■使用楽器: YAS-82Z



PROFILE: 馬場智章

2005年、タイガー大越氏により開催されたBerklee College of Musicタイアップの「北海道グループキャンブ」で優秀賞受賞。2010年、テリ・リン・キャリントン(Ds)が指揮するBerklee Summer Jazz Workshopのメンバーに選抜、奨学生として参加。2011年、パークリー音楽大学に全額奨学生として入学以来、テリ・リン・キャリントン、テレンス・ブランチャード(Tp)、ジェミー・カラム(Vo,Pf)等のグラミー・アーティストと共演。2016年から4年間「報道ステーション」のテーマ曲を所属するバンド「J-Squad」で手掛け、UNIVERSAL MUSIC JAPANよりアルバム「J-Squad」、「J-Squad II」をリリースし「Blue Note Tokyo」、「Fiji Rock Festival 17」にも出演。2020年に自身初のリーダーアルバム「Story Teller」、2022年4月に2ndアルバム「Gathering」を発表。2023年2月公開、大人気コミックスのアニメーション映画化「BLUE GIANT」で、主人公「宮本大」の演奏を担当。

■使用楽器: YTS-82ZSWOF

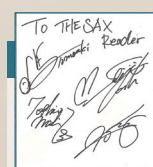
たです。それぞれの違いというか、結果としての楽器の仕様の違いはあっても、音に対する誠実な態度はみんな同じだなと思いました。それぞれの求めるセッティングも、実は何千通りもあると思うんです。その日のコンディションにもよるし。ヤマハの楽器は総じて、そういう様々な状況に対応可能な、付き合いやすい楽器なんだと思います。自分のものが見つかるまでは悩むだろうけど、見つかったからは安心して続けられるので、早く自分の楽器に巡り会えますように……と、いつも願っています。

馬場 僕はミュージシャンにとって一番大切なものは音だと思っているので、長年自分の音を追求されてきた諸先輩の「こだわり」が聞けて、勉強になりました。

多田 それぞれの82Zとの出会いや思いが聞けて、共感したり新鮮な驚きがあったね！

三木 いい楽器って一つじゃないんだなと思いました。馬場ちゃんと僕が求めるものは違うし、多田さんと織田さんもそうでしょう。企業としてヤマハがそういう様々な要求のどこにフォーカスしていくかはすごく難しい問題なのなこととはよくわかんんです。難しい判断をするために社内で資料作ってプレゼンして……というのを繰り返しているのをずっとみてきて、これは本当に「プロジェクトX」みたいだなと思いました。

—— 様々な奏者に寄り添う楽器を作ることはとても難しく、楽器の仕様を決めていくプロセスはまさに「プロジェクトX」のようですね。奏者の声を大事にして、楽器の細部にまで大切に落とし込んでいく。さらに82Zはヴィンテージモデル一択だったジャズを志向する奏者の様々なニーズに応えるために、数多くのバリエーションも持っています。いろいろ試して自分自身の音を様々なバリエーションや組合せの中から探せるのも、Zの魅力の一つですね。



読者プレゼント

本インタビューに登場してくれた多田誠司、織田浩司、三木俊雄、馬場智章の各氏が寄せ書きしてくれた貴重なサイン色紙を本誌読者3名様にプレゼント！(詳細は本号P51を参照)

82Z設計スタッフが今だから明かす 驚きの開発エピソード!

Part.2

今は亡きモダンジャズの巨匠フィル・ウッズが開発に際してアドバイスを送り、晩年に長く愛用したことで知られる82Z。

ここでは、その現場をはじめ設計・開発の部署で実際に82Zの誕生や進化に携わってきた

ヤマハ株式会社B&O事業部 B&O開発部 部長の中島洋さんと、同じくB&O開発部 管教育楽器開発グループ主幹の内海靖久さんによる開発秘話をお届けしよう。(文:原田和典/協力:ヤマハ株式会社、株式会社ヤマハミュージックジャパン)

ヤマハ株式会社B&O事業部 B&O開発部 部長の中島洋さん(右)と、同じくB&O開発部 管教育楽器開発グループ主幹の内海靖久さん



フィル・ウッズの自宅で行なわれた82Z試作品の製品チェック

—— 2002年、第1世代のYAS-82ZとYTS-82Zが発売されました。開発のきっかけを教えてください。

中島 洋 当時のジャズミュージシャンはヴィンテージのサクソを使っての方が多かったんです。つまり、当時の新作のサクソが、そうした音楽家にとってはファーストチョイスじゃなかった。ジャズやポップスを演奏する方々と寄り添える新作商品も必要だということで私の先輩の鋭持さんが中心となって開発しました。

内海靖久 ジャズの方にもYAS-62やYTS-62であるとか、当時のカスタムである875シリーズ、旧モデルである855シリーズを見てはいただいていたと思うんですが、82Zに関しては、本当にジャズの演奏家、ヴィンテージサクソフォン等を愛用する人たちを意識して作られたと聞いています。

中島 62の基本設計をベースに、新しい要素を加えた上で、まずジャズの奏者に見てもらいたいと。

—— 開発にアドバイスを送ったフィル・ウッズとは、どんなやり取りがあったのでしょうか？

中島 2001年にアメリカで木管楽器すべてのR&D(Research & Development)担当者になりました。ちょうどその頃「フィル・ウッズがヤマハのクラリネットに関心を持っている」という話が耳に入ったんです。フィルさんはジャズサクソ奏者ですが、ジュリアード音楽院ではクラリネットを専攻していました。そこでクラリネットと一緒に、ちょうど開発が始まっていた82Zの試作品も見てもらおうと。ウェートのバランスも見直して、軽くするところは軽く、締めるところは締めるなどジャズ奏者が求める性能を目指して作られた試作品です。最終的に855ベース、62ベースの82Zのラッカー仕上げ、82Zのアンラッカー仕上げの計3本の試作品を自宅まで持って行って、吹いてもらいました。その中で最後に吹いたアンラッカーがもの凄いい勢いで鳴って、彼独特のフレーズも飛び出して「この楽器にはガッツがある、魂がこもっている!」と言って、その日から使い始めてくれました。

1か月後、日本から「一部の部品を変えたい」という連絡がありました。フィルに「絶対に元に戻るから」と説得して、一部部品を組み替えて。で、部品を変えたら今度は鳴らなくなっちゃった。フィルに「これはひどい!」と激怒されて、またまた元に戻して。「直りました。これで大丈夫です」と伝えたら「大丈夫かどうかは俺が吹いて決める」と言われて(笑)。自分のせいでヤマハとフィル・ウッズの関係が終わるかもしれないと思って、死ぬほど喉がカラカラになりました。結果的には「you can stay」と言われたんですが。



初めて82Zのテストをした日にフィル・ウッズの自宅前にて。上段中央がフィル、その右隣が当時の設計者である鋭持さん、フィルの左隣がピアニストのEric Doney、下段右が中島さん

高い次元で表現したい音楽家たちに寄り添うことを標榜する82Z

—— ハイF# キーなしのモデルが用意されたことも話題を集めました。

中島 2001年にボブ・マローン(ボビー・シュエとヤマハのジャズ・トラパンベットも開発)と私がいた、当時(ミシガン州) グランドラピッズにあったカスタムショップでこの改造を始めました。特にテナーはアルトより管が長い。奏者がより楽器と一体化するためには余分な空間がないほうがいいと思いましたし、ヴィンテージを使っている奏者はF# キーなしでも高音はフラジオで出せますから。アンラッカーもF# キーなしも当時のヤマハでは製品化されていなかったの、それを何とか出そうと日本側に評価を送って、達成しました。営業チームも一緒になって新しい売り方を考えてくれたと思います。

—— 2013年には第二世代が発売されましたが、両世代の82Zを通じておふたりが最も大事にしていることは何でしょうか？

内海 第一世代は欧米でも良い評価をいっぱいいただきましたが、もっと進化させたいという思いがありました。初代発売からいただいたフィードバックを元に第二世代の開発を始め、10年後にリリースすることができました。両世代を通して大事だと思ったのは、高い次元で表現したい音楽家たちに寄り添うこと。百人分の希望に沿う百通りの楽器を作れるわけではないのですが、一人ひとりと真摯に向き合って、彼らの演奏を支援すること。そこはブレずに取り組みたい。そのために基本性能をしっかりと作りこんで、プレイヤーの表現したいことができるような楽器にしたいですね。

中島 海外のR&D時代、私のほうで個性を作り込んだ楽器を持っていても、演奏家から「俺はもっとこうやりたい! もっと自由度が欲しい!」と言われることもよくありました。製作側で楽器の個性を制限してしまう前に、大きなキャパシティを持った楽器を奏者に提供する。どこまで表現者に寄り添っていくかが、これからも私たちの課題です。

—— 奏者の思いに真摯に耳を傾け、奏者の演奏を楽器開発を通してサポートしていく。その姿勢は昔も今も変わらず、Yamahaの開発メンバーにしっかりと受け継がれていることがよくわかりました。ありがとうございます。

Yamahaカスタム82Zが 敏腕ジャズメンたちに選ばれるワケ

ここからはYAS-82ZとYTS-82Zで世界のジャズ・シーンを賑わすトップ奏者たちの声を一挙にご紹介しよう。

様々なジャズのスタイルで活躍する名手たちから82Zへの厚い信頼がうかがえるコメントが集まった。(掲載はABC順)

Q1. プロ奏者になろうと思ったきっかけは? / Q2. 82Zを初めて吹いた際の印象と使おうと決めた理由は? / Q3. プロとしてのキャリアで82Zを使った印象的な仕事は? / Q4. 82Zの気に入っている点は? / Q5. ヤマハの楽器の良さとは? 選んで良かったと思うことは? / Q6. 82Zはどんな奏者にオススメしたい?

榎本有希 Yuki Enomoto / 使用モデル: YAS-82ZUL



- A1. 私は京都橘高等学校吹奏楽部の出身なのですが、当時アメリカでローズパレードという世界的に有名なパレードに参加させていただき、その時に感じた感動が忘れられず音楽を仕事にしたいと思い始めました。
- A2. 初めて音を出した瞬間に今まで求めていた吹奏感だったので驚きました。吹き込むごとに表現の幅もグッと広がっていくのだらうなと確信できたので選びました!
- A3. 自身の活動に加え、ロック色の強いアイドル現場からミュージカルのホーンセクションまで違和感なく使えて、どこの現場でも以前よりも楽しく吹けている気がします!
- A4. 低い音から高い音まで比較的コントロールしやすく、自分の出したいと思う音色やタッチでストレスなく吹けることです。
- A5. やはり国産楽器ということで楽器としての作りなどが安定していて、個体差にムラがないということが魅力の一つかなと思います。そして新品でありアンラッカーということで吹き込めば吹き込むほど深みが出て、またヴィンテージとは一味違う自分だけのクセを楽器につけていけるという点も良いなあと思います。
- A6. とてもフラットな状態で吹けるため、こちらのコントロール次第で表現の幅が広がります。なので、その辺りをコントロールしたい方にオススメできるのかなと思います!

福井健太 Kenta Fukui / 使用モデル: YTS-82ZASP (BRASS EXCEED TOKYO, Z Express Big Band)



- A1. 楽器を買ってもらうための口説き文句が「プロになりたいから!」。
- A2. 音色のオリジナリティーと(見た目もですが)反応の良さと操作性。
- A3. 入手したばかりの頃、日本武道館のステージでラッカーがダークカラーのせいかマイクとベルの距離を測り間違えてぶつけてしまいました。ステージ上が譜面灯の灯りしかなく暗かったのですが、新品のベルにばっちりエクボが……。直さず戒めとしております。
- A4. 全音域での反応の良さと、鳴りの均一なこと。材料の影響なのかどんなに吹き込んでいっても崩壊せずに音色を作れるところ。
- A5. イントネーションの安定感やどの現場に持って行っても安心して演奏できる品質。
- A6. バランスの良い楽器を求めている人にはおすすめです。

石毛杏子 Kyoko Ishige / 使用モデル: YAS-82ZS



- A1. 正直、「プロになろう!」と思ったことはありません。上手になりたい、と目の前のことをやっていくうちに少しずつ声がけ頂けるようになって行きました。
- A2. 第一印象は「反応が良い(息を入れてから音になるまでが速い)!」です。通常のラッカーを買うつもりでしたが試奏でシルバーも吹かせていただき、吹奏感の気持ち良さにびっくりしました。ヴィンテージと現行品の違いで一番心配だった「吹き始めの反応」が特に良いと感じ、シルバーに決めました。
- A3. 録音でG#のフラジオが出てきた時に、前はテイクを重ねてしまったのですが82Zでは一発でOKテイクが取れたのが印象的です。
- A4. 音程が良いこと、息がツルッと入ってしてくれるような吹奏感です。練習より、本番で演奏している時に特に吹奏感の気持ち良さを感じます。色んなことが必死になった時に(笑)、楽器が受け止めてくれているのだと思います。
- A5. 総じてバランスが良いことだと思います。この点は良いけどこの点は良くない、といったムラがないこと。吹奏感の良さから来ていると思うのですが、普段出てこないフレーズが思いがけず出てきてメロディックなアプローチができた時、ヤマハにして良かったと思いました。
- A6. 音程や高音の出しにくさで悩んでいる方にぜひ吹いてほしいです。特に今ヴィンテージを使っていてそのような悩みをお持ちの方は一度試してみてください!

レイモンド・マクモーリン Raymond McMorris／使用モデル：**YTS82ZSWOF** (ネックスターリングシルバー G3)
(Z Express Big Band)



- A1.** 小学六年生の頃に、もう音楽が大好きだったから、それしかやりたくないと思って、必ず有名なテナープレイヤーになるぞ！って自分の中で決めてました。
- A2.** ヤマハのアトリエで楽器を吹いた時の第一印象と自分が買った楽器を吹いた時の第一印象は全然違いました。アトリエで吹いた時は、ものすごく吹きやすくて、パワーがありました！ いま持ってる楽器を初めて吹いた時には硬く感じて大変でしたが、7年経って今は音が柔らかくなってきて、パワーもあるし、吹きやすくなりました！
- A3.** Z Express Big Bandの仕事でJeff Coffinさんが一緒に演奏した時に、もの凄く感動しました！ ああいう方もYamahaを使っていて、一緒にステージをして、Yamahaプレイヤーになって良かったなと思いました！
- A4.** 音色は太くて、丸くてパワフルで好きです！そして力を入れても音が崩れない。そのままの音がしっかり出せます！そして音程も良くてセクションで吹いてる時に他のプレイヤーと合わせやすいです。
- A5.** Yamahaを選ぶ前にずっとヴィンテージの楽器を使っていました。その時に、音程が取りづらかったり、本体とキーの並びもあんまり気持ち良くなって、いつも修理に出していました。それによってストレスが溜まりました。ところがYamahaを買った時に前のその状態が落ち着きました。そして色んなスタイルも演奏しないといけないので、Yamahaがピッタリでした。なぜならどんなジャンルにも合ってる楽器だから！
- A6.** 初心者からプロまで。どんなプレイヤーでも。

菅野 浩 Hiroshi Sugano／使用モデル：**YAS-82ZWOF** (第二世代)
(Z Express Big Band, Gentle Forest Jazz Band, Alto Talks, Landmark Blueなど)



- A1.** 中学でジャズと出会い、今までSAXばかり吹いてきましたが、その過程で本気で音楽に取り組んでいる仲間が多くできました。その仲間たちと切磋琢磨して楽しんでいたらあっという間に今になったという感覚です。一緒に楽しく演奏できる仲間に出会えたことが大きいです。
- A2.** 第一印象はやはり現代の音がする、ということでした。どんな現場でも埋もれることなく存在できる。ネックなどカスタマイズできる幅が広いので、この利点を活用すれば自分のサウンド作りができると思ったことが82Zに決めた理由です。
- A3.** 屋外の演奏で急に雨が降ってきたとき、楽器が多少濡れても何も慌てなかった(笑)。ヴィンテージ楽器を使っていた頃は気が気ではなかったですからね。同じクオリティの代替器が全国どこでも入手できるとすると、常に安心感に包まれています。
- A4.** ラッカーなどの仕上げ、ネックの種類など、選択肢が多く、自分でカスタマイズできるところが好きです。音色、音量、音程、吹奏感などは、ネックひとつでガラッと変わるので本当に面白いです。ちなみに僕の使用ネックはV1GPです。
- A5.** 代替品がすぐ揃えられる。日本のメーカーなので直接メーカーに相談しやすい。作りがしっかりしている。ヴィンテージに比べて安い。次の時代の音を想像しやすい。
- A6.** 仕上げやネックなど、カスタマイズできる幅が広いので、本格的にサクスをやりたいけどどういう音を出したいか明確に定まっていない人や、各仕様の違いを吟味することが好きな人にオススメです

鈴木 圭 Kei Suzuki／使用モデル：**YTS-82Z, YTS-82ZS**
(Z Express Big Band)



- A1.** 上手になりたかったし、ずっと続けていくとは思っていたけど、本人的には、当時はプロになりたいという強い決意はしていなかった気がします……。当時から上手な同期のサクソ奏者がとても多いので、なんか勢いで……(笑)。いま思えば、大学でビッグバンドに入って、2年生のときにアメリカに演奏旅行したことで刺激を受け、のめり込んでいったのがきっかけかも。
- A2.** 反応がとても良く、奏法面での操作性、音色面にいい効果があった。いろんな楽器を試しましたが、自分の奏法と、そのとき出したい音色に合致したのが82Zでした。結局その後、銀メッキ82ZSも買いましたが……。
- A3.** コンサートツアーの中で数カ所だけの代役で演奏に行くとき、楽器の本数が多いと運搬ができないため、楽器本体をお借りすることがあります。借りた楽器が同じヤマハ82Zだったため、借り物で演奏しているという不安感がほとんどなく、シビアな演奏だったけどいつもの楽器のように演奏できました。
- A4.** 息に対する反応が速いため、ちゃんと太い息を入れていれば、アタックがハッキリして、ギュッと押したときに音の芯の成分が出しやすい。くぐもったような柔らかい音も出せる。音量の大小と、音質の強弱の関係が、コンパクトにまとまっているので、強く吹いても暑苦しい感じになりにくいように感じています。
- A5.** タンボや管体接合部などがちゃんと密閉度が高いため、音の直進性が強く、広い会場でも減衰することなく届けられる。また、レコーディングなどに使っても、出したい音色の成分を損なうことなくマイクを通した向こう側に伝えることができる。キィなど、機械的な動作面の信頼性が高い。音色と音程の偏りが少なく、飛び抜けてピッチ・音色の良くない音など、吹きにくい(できれば演奏したくない)音が少ないため、音楽に集中できる。
- A6.** 解像度の高い音色を出したい方。音楽にもっと正面から向き合うために、ピッチ、音色のばらつきや、楽器の構造上の不安なところを気にしたくない方。